【長篠・設楽原の戦い・その後の武田勝頼】

積雲寺➡

●設楽原の決戦から7年、武田勝頼は、武田軍の立て直しと民事に日夜肝胆を砕いてきたが、歴史の流れは、輝かしい甲斐源氏の名族武田氏を滅亡させるという、戦国の悲劇を勝頼に覆いかぶせた。天正10年3月3日、韮崎の新府城を出た武田勝頼は、再挙を図るべく国境の岩殿城を目指した。途中、心変わりをした小山田信茂の謀反にあい、進むことも退くこともかなわず、3月11日甲斐の国天目山の山麓の田野【旧大和村　現在甲州市】で、勝頼主従【侍44名と女房衆23名】は奮戦の後共に自刃して果てた。

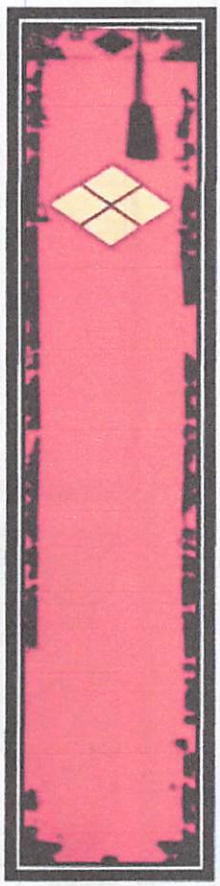
●山梨県甲州市田野の景徳院には、勝頼公と北条夫人と、嫡男信勝と家臣が祀られており【武田勝頼公まつり】が行われている。

景徳院山門➡

【武田勝頼公のその後にタイムスリップ】

甲州市積雲寺にある

武田軍の軍旗➡



・連戦連勝の武田勝頼も、【長篠・設楽原の戦い】で敗北を喫してしまいます、この戦いで多くの優秀な武将を失ったことが、僅か7年後に、戦国の名門武田家の滅亡にも繋がります。

・【武田勝頼軍は、なぜ敗れたのか？】

❶武田勝頼が、相手大将と比べ（経験が浅い）若かった。
・信長42歳　家康34歳VS勝頼30歳・信長軍には秀吉38歳も

❷信長・家康に比べ、鉄砲や火薬の入手が困難であった。
・大阪の堺は、信長に抑えられていた。兵農分離の部隊組織が遅れていた。一族郎党の部隊編成であった。

❸名門武田家の跡目相続のしこりが残っていた。勝頼は諏訪の人間・・諏訪四郎勝頼が当主になった。⇒武田四郎勝頼
・信玄以来の宿老と、勝頼に近い家臣の間にずれが生じた事。

❹父信玄でさえ攻略することが出来なかった、【高天神城】を攻略した自信が裏目に出た事。

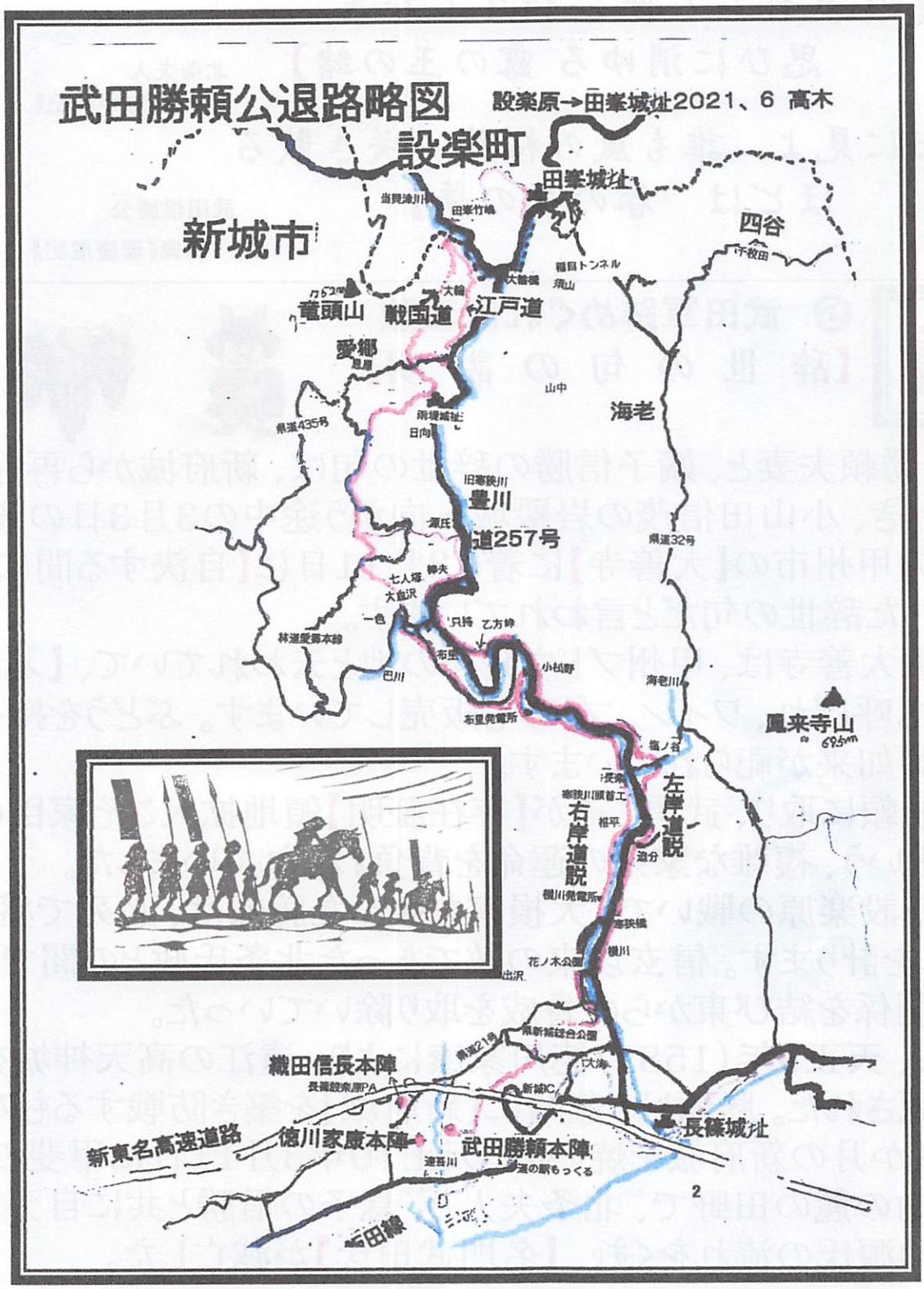
武田勝頼公の設楽原決戦場からの退路

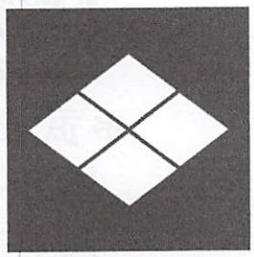
設楽原―猿橋を渡渉―追分―長楽―塩谷（玖老勢）〈追撃を避けるため間道である作手道をとり〉只持小松―寒狭川渡渉（小松ヶ瀬）―布里―時谷―巴川渡渉―一色―大落沢―嶋田天ヶ森―桜ヶ峠―恩原―道貝津（大輪）―当貝津川渡渉―竹鼻（田峯）〈田峯城入城の予定のところ、留守居をしていた菅沼定忠の叔父菅沼定直（入道・道喜斎）と家老今泉孫右衛門（道善）等の反逆に逢い入城不能〉根道伝いに段戸山大菅野（裏谷）―大多賀―藤沢―仲間塚―蛇平（駒ヶ原）―沖ノ平―を経て田峯菅沼氏の属城であった武節城に入って疲れを癒したのち、根羽（信州）、平谷、駒場、経山で甲斐に逃れた。案内役の田峯城主菅沼定忠は飯田迄随行したらしい。これは、菅沼家の家臣小野田喜八の記した『小野田家遺銘書』および田峯の『熊谷家談』等から明瞭である。

設楽原の馬防柵

設楽原
馬防柵

・この武田勝頼公敗走道図は、新城市郷土研究会の高木松生氏が作成されたものです。設楽原の決戦で形勢不利になった勝頼は、僅かな側近と戦場を離脱し、本国の甲斐の国を目指します。負け戦だから、敵に悟られ無いように密かに行動する為、勝頼一行が通った道筋には、伝承も少なく高木氏自身の探索探検と、検証推測で【武田勝頼公退路略図】を作られたものです。





長篠・設楽原の戦い後の武田勝頼公

【武田勝頼公夫妻と嫡子信勝の辞世の句】

【おぼろなる 月もほのかに 雲かすみ
はれてゆくゑの 西の山のは】 武田勝頼公
出典『理慶尼記』

【黒髪の 乱れたる世ぞ はてしなき
思ひに消ゆる 露の玉の緒】 北条夫人
出典『甲乱記』

【あだに見よ　誰も嵐の桜花　咲き散る
ほどは　春の夜の夢】 武田信勝公
出典『理慶尼記』

❻ 武田軍跡めぐれば哀歌

【辞 世 の 句 の 説 明】

＊武田勝頼夫妻と、嫡子信勝の辞世の句は、新府城から再起を図るべき、小山田信茂の岩殿城へ向かう途中の3月3日の夜、現在の甲州市の【大善寺】に着き3月11日に【自決する間に】詠まれた辞世の句だと言われています。

・柏尾山大善寺は、甲州ブドウ発祥の地と云われていて、【ぶどう寺】とも呼ばれ、ワイン、ブドウも販売しています。ぶどうを持った薬師如来が祀られています。

・武田勝頼に取り、武勇こそが【存在証明】領地拡大こそ家臣の結束という、複雑な家系の運命を背負わされていました。

＊長篠・設楽原の戦いで、大損害を被つた勝頼は、必死で盛り返しを計ります。信玄以来の敵であった北条氏政との間で、同盟関係を結び東からの脅威を取り除いていった。
しかし、天正9年（1581）徳川家康により、遠江の高天神城を奪い返された。勝頼は、韮崎に【新府城】を築き防戦するものの在城1か月の新府城を焼いて、天正10年3月11日に甲斐の天目山の麓の田野で、北条夫人と、息子の信勝と共に自刃して清和源氏の流れをくむ、【名門武田氏】が滅亡した。

【武田勝頼（武田家）は、設楽原の決戦の後なぜ僅か7年で滅亡したのか】・戦国最大のミステリー

・武田勝頼は、真の武田信玄の後継者ではなかった。信玄の遺言の中に孫の信勝が16歳になった時に、勝頼は家督を正式に譲り、信勝の後ろ盾として陣代の役目を果たすと記されています。勝頼は、複雑な家系の生い立ちでした。武田信玄は、甲斐の地から領土の拡大を目指します。南に今川家、東に北条家と強国に囲まれていた信玄は、まず北に位置していた信濃攻略の足掛かり拠点としたのが諏訪でした。諏訪家は、代々諏訪大社の最高位の神職を務める大祝（おおほうり）でした、勝頼の母は、信玄の則室で諏訪御料人、信玄が滅ぼした諏訪の統治者諏訪頼重の娘です。複雑な生い立ちが、名前にも影響していました。武田家の男子には、【信】の字が通し字として付けられて来ました。長男義信、次男信親、三男信之、四男の勝頼、勝頼だけが付いていません。名前からして信玄の後継者ではなかった訳です、勝頼が16歳になった時、信玄の命で諏訪家の当主となり、諏訪四郎勝頼を名乗り、高遠城の城主として諏訪を治めました。しかし長男義信は、謀反の罪で自害、次男は盲目、三男は早世で武田家の跡取りにはなれず、信玄急死により予期せぬ形でトップの役割が回つて来た、それにより諏訪四郎勝頼が武田四郎勝頼になった。武田家の家臣の中にも、戦いで滅ぼした相手が、武田家の当主になる事に、多くの不満を抱いた者もいたと推測される。又、納得出来ない家臣もいたと思われる。版図の拡大こそが、武田家臣団を統率してリーダーとして認めてもらう唯一の方法と考え、その事が、勝頼を【長篠・設楽原の戦い】へと軍を起こさせた原因の1つだと思われます。初期の長篠城の【奪還目的】が、設楽原で目の前に現れた織田信長・徳川家康軍を前にして、血気盛んな若い判断が押し太鼓の音とともに、武田軍の全軍突撃の号令を下した。

・・そして山縣昌景・馬場信房・内藤昌豊・土屋昌次などの武田軍の、猛将知将の有能な武将が失われてしまった。これを機に急速に武田家の勢力が衰えて行くことになります。

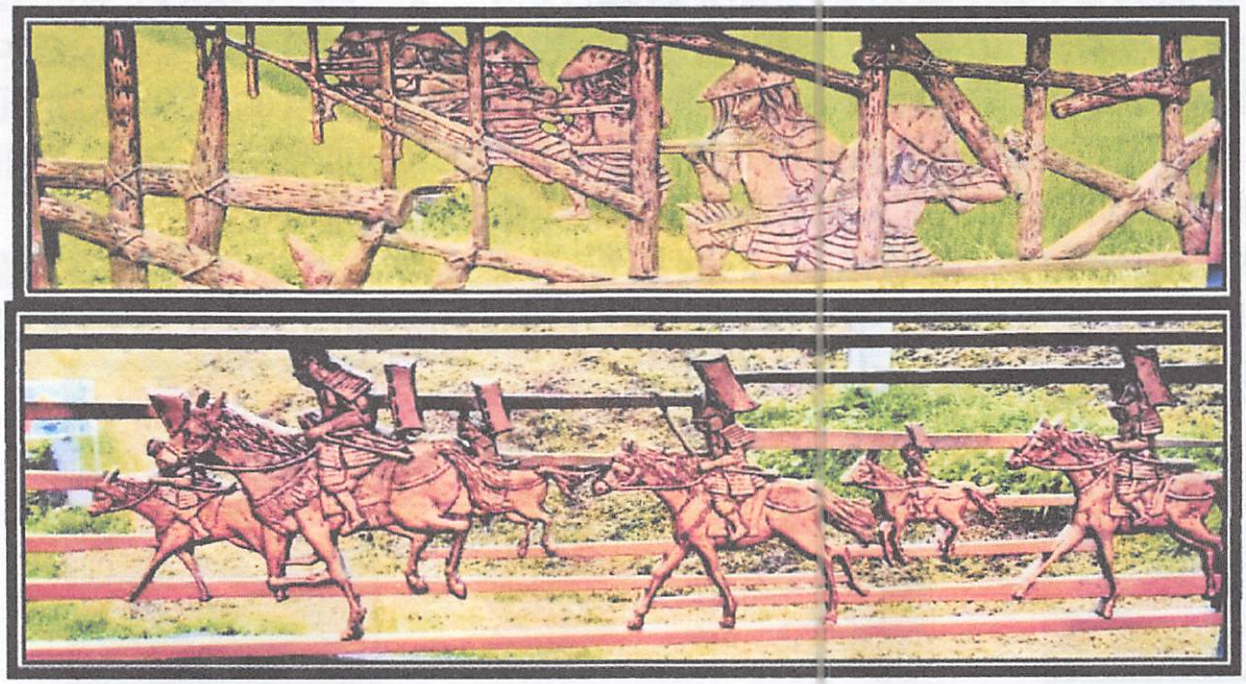
突撃

【チンギスハンは義経だった：英雄伝説がここにも】
武田勝頼公は、天目山から逃れて四国に渡り、大崎玄蕃と名前を変えて活躍したと伝わる落人伝説があります。

・歴史資料館から信玄塚への小道に「宇宙桜」が植樹されています。これは【武田勝頼土佐の会】が植えたものです。高知県吾川郡仁淀川町では、その伝説の元に、観光振興のために歴史ロマンの発信をして、かつよりくん弁当や、かつよりキャラ募集をしています。

武田勝頼キャラ
"かつよりくん"

【土佐の会へのタイムスリップ】 新城市設楽歴史資料館エリア

・宇宙桜は、【武田勝頼土佐の会】が、平成29年4月29日の設楽原をまもる会の総会後に植樹したもので別名【ひょうたん桜】とも言います。遅咲きの桜で、設楽原歴史　料館周辺の桜が満開後に薄白色の花を咲かせます。
・武田勝頼公が、甲斐の天目山で自決せず、土佐に落ちのびていたなんて、なんという戦国の【歴史のロマン】ですね。

☞ 柳田橋の欄干のレリーフ　武田騎馬隊を迎え撃つ鉄砲隊